

「グリーンインフラ」の時代へ

第1回

東邦レオ 専務取締役 木田 幸男



都市における「良い環境」とは

30年ほど前、都市における「良い環境」のキーワードは、「美しい」「潤い」「賑わい」「誇り」だった。緑化は、「美しい」や「潤い」などの二要素として整備され、「きれい」や「癒される」などといった直接的な受け止められ方で進化してきた。ところが、現在のよ

うに成熟した都市の中で再度「よい環境」を考えると、もうこれら4つの言葉だけでは表現できない「よい環境」がほしい。そこに

災害への「安全」や「冷える」といった気候変動に関する都市基盤の問題を解決できる要素が入ってこなければ「良い環境」にはならないのだ。6割近くの人が都市に住む現状、年々都市型集中豪雨が激しくなる現状に危機感が高まる。しかし、具体的な対応策がない苛立ちにも気づかされ

ると、東京のように大きな街がいくつもあり、当然そこではヒートアイランド現象の激化や都市型集中豪雨対策に苦慮している。しかし、ここで日本と違う点は、大きな都市ほど緑をうまく使ったグリーンインフラ技術に注目し、結果を出している点だ。グリーンインフラとは、緑(グリーン)

術(これをグリーンインフラと呼ぶ)に対して、多くの便益を明らかにしながら世界的な流れとして広がっている。例えば、米ニューヨーク市のNYCグリーンインフラストラクチャープラン(2013年)や、環境先進都市で有名な米オレゴンポートランド市の「グリーンインフラ」という言葉が随所に使われている。また、日本建築学会における委員



海外で始まるグリーンインフラ(米ポートランド市資料より)

緑の機能 都市基盤に活用

豪雨対策などで世界の潮流に

いが、地下には多くの排水管が敷設されているが、近年の都市型集中豪雨の大型化に対応しきれないのが現状だ。そもそも、このような施設を作らなければならなくなった原因は、地表面をコンクリートやアスファルトで覆ってしまった都市化にあり、これに対して何らかの手法で対応する必要に直面している。

日本の事情に合わせた技術・手法が必要に

日本の事情に合わせた技術・手法が必要に

日本においては、2015年の国土交通省による「国土のグランドデザイン2050」の中に、初めてグリーンインフラという言葉が登場した。この国土形成計画は閣議決定で定められていることから、わが国の社会資本整備の方針として正式に取り入れられたことになる。また、今年5月に

国土強靱化政策の一環としての活動であるグリーンインフラの活用が、海外に導入してもうまく機能し

ない。やはり、日本の事情に合わせた技術開発が必要となる。メンテナンスなどの長期にわたる問題点も検討しておかねばならない。

この連載では、そのような方向性を明確にしつつ、今後世界の各都市の戦略と手法を紹介し、最終的に日本発の独自手法を提案していきたいと考えている。

「きた・ゆきお、日本緑化学会副会長、技術士(都市および地方計画)」

「きた・ゆきお、日本緑化学会副会長、技術士(都市および地方計画)」

「きた・ゆきお、日本緑化学会副会長、技術士(都市および地方計画)」

一方、海外に目を向け

一方、海外に目を向け

一方、海外に目を向け

一方、海外に目を向け



ゲリラ豪雨 (https://ja.wikipedia.org/wiki/)

ゲリラ豪雨 (https://ja.wikipedia.org/wiki/)

ゲリラ豪雨 (https://ja.wikipedia.org/wiki/)

ゲリラ豪雨 (https://ja.wikipedia.org/wiki/)

ゲリラ豪雨 (https://ja.wikipedia.org/wiki/)

ゲリラ豪雨 (https://ja.wikipedia.org/wiki/)